

鐵曲
流木
竹
雲

大正拾二年三月拾六日作
 井田 查村
 (一九三三、三、一六)

流

九

行

雲

大正拾二年三月拾六日

奉為願

林
玉香村

心 乃 力

(NO.)

大正 拾二年 七月 廿拾日

午後七時以迄、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、

月曜 日 後日 平井の場所 其新用 雑日米語 英語畢 專日

土曜 日 終日 辻代の場所 其新 雑日米語 英語畢 專日

水曜 日 平井の場所 其新 雑日米語 英語畢 專日

木曜 日 板井の場所 其新 雑日米語 英語畢 專日

金曜 日 辻代 其新 雑日米語 英語畢 專日

土曜 日 辻代 其新 雑日米語 英語畢 專日

一、座方銘 日々の心を、人々の心を、己の心を、思ふ。 淡泊なれ。

一、高遠なる自己の将来の目的を、忘るゝに、常に、勉め、沈黙なれ。

二、日夜自己の人格を修養する事を、懈らざるを、勉め、克己なれ。

三、時日生命なり、明は待たず、主とて、善を行へ。 黙思なれ。

四、假りにても、虚偽なく、強健に、近き人の短を、責む勿れ。 従順なれ。

五、徳を身算に、希望を将来に、属せよ。 林田吉村。

六、名を、知る、千里の外も、見人、牛の歩みの、一、歩、

題 神ハ愛カ
 一 言 録 の 下 稿 四 羅 奇 雲 井

心 現 代 所 田 金 一 喜

人 物 主 人 名 廿 四 春 隆 十 八 愛 子 一 十 五 喜 子 十 五 田 中 十 五

日 言 田 隆 行 一 喜 子 喜 子 廿 五 五 十 五 十 五 喜 子 十 五

長 所 知 々 喜 子 隆 行 十 五 喜 子 十 五 喜 子 十 五 喜 子 十 五

喜 子 知 々 喜 子 隆 行 十 五 喜 子 十 五 喜 子 十 五 喜 子 十 五

喜 子 知 々 喜 子 隆 行 十 五 喜 子 十 五 喜 子 十 五 喜 子 十 五

喜 子 知 々 喜 子 隆 行 十 五 喜 子 十 五 喜 子 十 五 喜 子 十 五

喜 子 知 々 喜 子 隆 行 十 五 喜 子 十 五 喜 子 十 五 喜 子 十 五

恵子の物語

恵子の栄光 老の栄光

縁の石橋 人物

村田 守雄

中米生 十八才

原田 愛之

中米生 十八才

矢田 直之

中米生 十八才

富田 権勝

中米生 十八才

原田 五平

中米生 十八才

原田 五平

中米生 十八才

場所

田舎

時代

現代 三月

長月な一様の雲も無き日正隆の夕方空 田舎の人の心算者、一花の梅を
美しうと云ふるに 斗つてのやうな 雲の影、前 花園は色んな花の咲き
一丈の光に 描かれたスミレが 三三三 頂上を 一丈の光に 描かれたスミレが
居る 一丈の光に 描かれたスミレが 三三三 頂上を 一丈の光に 描かれたスミレが

守一やん 来りやうと云ふ 守一やん 来りやうと云ふ 守一やん 来りやうと云ふ
守一やん オホー オホー 守一やん オホー オホー 守一やん オホー オホー

守一やん 来りやうと云ふ 守一やん 来りやうと云ふ 守一やん 来りやうと云ふ
守一やん オホー オホー 守一やん オホー オホー 守一やん オホー オホー

守一やん 来りやうと云ふ 守一やん 来りやうと云ふ 守一やん 来りやうと云ふ

守一やん 来りやうと云ふ 守一やん 来りやうと云ふ 守一やん 来りやうと云ふ

守一やん 来りやうと云ふ 守一やん 来りやうと云ふ 守一やん 来りやうと云ふ

ツ 名物も 赤い山を 見ても 赤い
旅は 窮乏 又 来す 行かす

守やん きて 母 歸る 頂戴 山 いく 守徳の 飯を 下す

いかに 見通の 赤い 旅の 運命に とも する

あはれ する 赤い 旅の 運命に とも する 赤い 旅の 運命に とも する

んは 女 人 言 言 言 歸る 赤い 旅の 運命に とも する

彼の人 前 さん 見 見 見 赤い 旅の 運命に とも する

其上 守やん 守やん 赤い 旅の 運命に とも する

は 赤い 旅の 運命に とも する 赤い 旅の 運命に とも する

讀も 傳 傳 言 言 言 赤い 旅の 運命に とも する

もし 入 入 一方 赤い 旅の 運命に とも する

し しか しか 入 入 手 手 赤い 旅の 運命に とも する

日 陽 赤い 旅の 運命に とも する 赤い 旅の 運命に とも する

赤い 旅の 運命に とも する 赤い 旅の 運命に とも する

赤い 旅の 運命に とも する

赤い 旅の 運命に とも する 赤い 旅の 運命に とも する

赤い 旅の 運命に とも する 赤い 旅の 運命に とも する

赤い 旅の 運命に とも する 赤い 旅の 運命に とも する

赤い 旅の 運命に とも する 赤い 旅の 運命に とも する

赤い 旅の 運命に とも する 赤い 旅の 運命に とも する

赤い 旅の 運命に とも する 赤い 旅の 運命に とも する

赤い 旅の 運命に とも する 赤い 旅の 運命に とも する

赤い 旅の 運命に とも する 赤い 旅の 運命に とも する

此の時 喜めりなり 守性の人こまぢなり

守性 何故 夢やん 泣きよ、女 悲しき女 婦人なり ぬつた 人なり

よし 守性より三毛かたにきこえて

守性 何事な 木田さへ 運れ 来た どうなり 夢やんが泣きこや
なつた 人な 事すくさむつ 元は来こたつ しんけんかぬこや

夢の一層はさきより こころに 二層のちみこや

よし 守性 今君は良し 明朝 運れ 歸せん 女はす 他人の元

却長さんのお思ひも 悲しき 行か 夢は 来しよめや 女の人よ 守性
そいふ言つたさの 明朝

守性 伯母さん 信は 何も 思ふ 事な 無き 木田 来もの 運れ 行こい

言ふ なるは 歸れ とも 言ふ 来かこ 運れ 来たあよ

よし 運れ 来たあよ 書か 元は 処置す 運れ 行け 良しのは
元は 来かこ 無きやん 泣く やや なるの お 夢を 夢し たり おひは たり

泣くのも

守性 ちりー 運れ 知らんかこ 言ふ 方よ

守性 教りて 見よ

よし 人な なる 夢の 事 言ふ 女は 言ふ 人な 事 言ふ 知れ

守性 元は 夢を 知らんかこ 女は 元は 言ふ 方よ

守性 元は 夢を 知らんかこ 女は 元は 言ふ 方よ

守性 夢を 知らんかこ 女は 元は 言ふ 方よ

守性 伯母さん 夢が 来た 女は 元は 言ふ 方よ

よし 人な なる 夢

守性 いえー もー 夢に 言ひま

よし 守性 もう いえ 夢に 言ひま 明朝 運れ 女は 行け なる 三毛 運れ
事な 夢の 事 言ふ 方よ

守性 伯母さん 夢が 来た 女は 元は 言ふ 方よ

よし
いふしは、見し手方さる

申す様、御覧の上、二階に付く、安んずる、自らの、此の、所、に、
何、か、う、な、こ、こ、に、し、ゆ、り、や、な、れ、の、際、に、の、ち、を、見、し、
急、に、机、に、こ、た、け、し、

寺様、の、う、ち、に、見、お、か、る、安、ん、ず、る、の、ち、に、移、つ、て、な、に、腰、を、め、め、し、

寺様
安んずる、様、に、す、寺、に、し、
之、事、無、し、

安んずる、な、に、は、く、の、ち、に、
そ、ん、な、事、に、は、く、
候、も、無、し、や、な、の、
僕、の、明、朝、運、を、し、
候、も、一、さ、し、由、安、ん、ず、る、は、な、い、な、

寺様
安んずる、寺、様、に、か、ん、よ、
安、ん、ず、る、心、を、知、つ、こ、し、
知、つ、こ、し、
オ、ウ、ー、オ、ウ、

寺様
安んずる、何、の、由、か、
安、ん、ず、る、方、え、き、
生、き、た、か、
か、ん、よ、
寺、様、に、

顔、上、に、い、え、
僕、の、明、朝、運、を、し、
候、も、一、さ、し、
由、安、ん、ず、る、は、な、い、な、
安、ん、ず、る、心、を、知、つ、こ、し、
知、つ、こ、し、
オ、ウ、ー、オ、ウ、

寺様
安んずる、
寺、様、に、

寺様
安んずる、寺、様、に、
安、ん、ず、る、心、を、知、つ、こ、し、
知、つ、こ、し、
オ、ウ、ー、オ、ウ、

寺様
安んずる、寺、様、に、
安、ん、ず、る、心、を、知、つ、こ、し、
知、つ、こ、し、
オ、ウ、ー、オ、ウ、

寺様
安んずる、寺、様、に、
安、ん、ず、る、心、を、知、つ、こ、し、
知、つ、こ、し、
オ、ウ、ー、オ、ウ、

寺様
安んずる、寺、様、に、
安、ん、ず、る、心、を、知、つ、こ、し、
知、つ、こ、し、
オ、ウ、ー、オ、ウ、

寺様
安んずる、寺、様、に、
安、ん、ず、る、心、を、知、つ、こ、し、
知、つ、こ、し、
オ、ウ、ー、オ、ウ、

三人 一 静かな庭の上を、いーと川の流るを見へー

静かな庭へ 雲は一人影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

月影 文は中々のいふ牛を取るまゝ 一の望をいふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

A 時の時先生 歸る来とふ方右にさへ二人へ人へはいつちも遠くへ居た

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

意を知つては居る方へまゐる 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

あふくさくさ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

A 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

A 人方へつたの 一 家へ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

A 見くはさすけい 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

A 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

いふ 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

雲 歸る 一 雲の影のふかさを 葉をささぐ 心に思ふあふくさくさ

門の傍へは僕が後へ歸りかゝる先きに
居ることもわづかぬ
Aの

門の傍へは僕が後へ歸りかゝる先きに
居ることもわづかぬ
Aの

門の傍へは僕が後へ歸りかゝる先きに
居ることもわづかぬ
Aの

門の傍へは僕が後へ歸りかゝる先きに
居ることもわづかぬ
Aの

門の傍へは僕が後へ歸りかゝる先きに
居ることもわづかぬ
Aの

門の傍へは僕が後へ歸りかゝる先きに
居ることもわづかぬ
Aの

門の傍へは僕が後へ歸りかゝる先きに
居ることもわづかぬ
Aの

門の傍へは僕が後へ歸りかゝる先きに
居ることもわづかぬ
Aの

門の傍へは僕が後へ歸りかゝる先きに
居ることもわづかぬ
Aの

門の傍へは僕が後へ歸りかゝる先きに
居ることもわづかぬ
Aの

門の傍へは僕が後へ歸りかゝる先きに
居ることもわづかぬ
Aの

門の傍へは僕が後へ歸りかゝる先きに
居ることもわづかぬ
Aの

門の傍へは僕が後へ歸りかゝる先きに
居ることもわづかぬ
Aの

門の傍へは僕が後へ歸りかゝる先きに
居ることもわづかぬ
Aの

門の傍へは僕が後へ歸りかゝる先きに
居ることもわづかぬ
Aの

足る国に人の白洲は五平を 其後 其前にさしし 然るに
中いふ事(き)の心也 其れに 今に其の 五平を 其の心はれん
其の心を其の心 其の心を其の心 其の心を其の心

う、その心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は
其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は
其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は

五平 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は
其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は

其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は
其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は

五平 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は
其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は

其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は
其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は

其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は
其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は

其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は
其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は

其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は
其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は

其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は
其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は

其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は
其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は

其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は
其の心は 其の心は 其の心は 其の心は 其の心は

てめ方言 素の意 思 掃却 万幸 一 百 見

種へ
思へず、
乙女はすさうに
かゝり又来ます
ゆゑにす

~~おれ~~
す
良
い
や
か
の
鐘
も
し
お
え
か
る
火
鉄
に
糸
を
あ
か
る
あ
た
り
な
き

直の
 かし
 ち
 之
 ず
 三
 分
 一
 立
 上
 之
 坐
 下
 之
 火
 往
 来
 一
 寸
 許
 指
 地
 生
 之
 一
 寸
 七
 分
 是
 其
 形
 新
 圓
 形
 之
 具
 也

將地生之
一曰左足如
新圓形之足

五平、
五平生に於て無
方勢かたなり
五平生に於て無

白雲山房

何の学問にも
苦み
守唯之
同様に
莫大に
作ら
か
か

性
健
な
か
の
太
学
に
行
け
る
校
に
や
な
い
と
い
は
な
い
と
い
ふ
す

五平(五平)とて
よかろ博志
おつや博志

或當の言ふに、
「や、無か
うなと
思はす、
良き

力にたぐやゆめを男は
 けあやう生
 生之気力へん
 其上有る

すじは、大方、権威も年増、たゞすみやあけまつて

[illegible]

す

そふや用ひたる方持也　そふ言ひもむすにけし

五平
云、言、信、た、少、は、田、力、一、田、推、姓

種姓(僥倖)を以て事ある事をも無きもの)

五平
はー
にや
口上は
めめた
すゑも
昔は
あつた
らう

重寶位に良卿の
十九日
午の
持方
力に
是を
見
院

半
校
の
史
也
ヤ
ヤ
に
な
か
る
中

[illegible]

いばり
る
甘いち

100

郵是、急よ
三日也
（注）
在分
在
在
在
在
在

中言て西遊記抄に
邦歌あり

皆より上げ一歩して 神は其何人か おろお嘆かぬわ
やの母をいつはのも 昨日も 来りて頂へこへて 下りて歸つたよー

いよいよ

も といふ神は其の事有るか 人 田舎の鬼つやめがさういふ事
いつもお祈りしたる 御目つきは人の有手な時と云ふ
神は其の神は其の神と云ふ 神は其の神と云ふ
神は其の神は其の神と云ふ 神は其の神と云ふ
神は其の神は其の神と云ふ 神は其の神と云ふ
神は其の神は其の神と云ふ 神は其の神と云ふ

いっせ

いっせ 一歩上げ

いっせ 始めをたやこをぬかす

いっせ ぬかす

いっせ ぬかす

いっせ ぬかす

いっせ

いっせ ぬかす

いっせ ぬかす

いっせ ぬかす

いっせ ぬかす

いっせ ぬかす

いっせ ぬかす

いっせ ぬかす

いっせ ぬかす

いっせ ぬかす

いっせ ぬかす

いっせ ぬかす

いっせ ぬかす

いっせ ぬかす

いっせ ぬかす

す！ 様々おえらうお国のことは困るさ何いもてなめな事を
弄やうこきさるゝ 本日は本音にお身体の事いさ

押解新聞はまよ

怪 僕らへいさな方うち分迄すきまを

（お国のこと）一重懸心すお手帳やんは之 年無事のまゝの年暮の事は
非常の事いふにさるゝお要の事いふにさるゝお要の事いふにさるゝ
其の上歸り日 歸るす 随分お母さんの事をやめたいといふ事

怪

なうに村中春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜
月影は 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜

や 志あるおれ 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜

（お国のこと）一重懸心すお手帳やんは之 年無事のまゝの年暮の事は
非常の事いふにさるゝお要の事いふにさるゝお要の事いふにさるゝ

お母さん 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜

送り状 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜

今夜は 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜

お母さん 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜

お母さん 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜

明日は 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜

停車場 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜

お母さん 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜

お母さん 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜

お母さん 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜

お母さん 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜 春分夜

M 僕は余り忙かゝり又来さう今思ふに先禮するよ

指のや明後日僕日暮るに逢ふ事やう

いづれもすまぬわい

指のや明後日僕日暮るに逢ふ事やう

いづれもすまぬわい

指のや明後日僕日暮るに逢ふ事やう

いづれもすまぬわい

指のや明後日僕日暮るに逢ふ事やう

いづれもすまぬわい

指のや明後日僕日暮るに逢ふ事やう

いづれもすまぬわい

指のや明後日僕日暮るに逢ふ事やう

いづれもすまぬわい

指のや明後日僕日暮るに逢ふ事やう

いづれもすまぬわい

指のや明後日僕日暮るに逢ふ事やう

いづれもすまぬわい

指のや明後日僕日暮るに逢ふ事やう

いづれもすまぬわい

指のや明後日僕日暮るに逢ふ事やう

いづれもすまぬわい

指のや明後日僕日暮るに逢ふ事やう

いづれもすまぬわい

指のや明後日僕日暮るに逢ふ事やう

いづれもすまぬわい

指のや明後日僕日暮るに逢ふ事やう

色く勉強の味に
なまり、此のお母さんの言葉を守りおこなふ
学校卒業後、あめりかに行く前夜、愛やん仲良しく
別れお母さんの心はえんねる。お母さん、さよなら

守つて
ふた
中へ
流木
な
新
けし
中
身
は
う
て
守
つ
ま
す

世
高くとまへるを
とめんと
またた甲斐あり
あと言ふも
いふ

あめりかのちひさには
まくに
きん
はーわいど

元 出 4 考 目 三 の 中 心 是 へ 後 々 以 日 日 日

卷一
 卷二
 卷三
 卷四
 卷五
 卷六
 卷七
 卷八
 卷九
 卷十
 卷十一
 卷十二
 卷十三
 卷十四
 卷十五
 卷十六
 卷十七
 卷十八
 卷十九
 卷二十
 卷二十一
 卷二十二
 卷二十三
 卷二十四
 卷二十五
 卷二十六
 卷二十七
 卷二十八
 卷二十九
 卷三十
 卷三十一
 卷三十二
 卷三十三
 卷三十四
 卷三十五
 卷三十六
 卷三十七
 卷三十八
 卷三十九
 卷四十
 卷四十一
 卷四十二
 卷四十三
 卷四十四
 卷四十五
 卷四十六
 卷四十七
 卷四十八
 卷四十九
 卷五十
 卷五十一
 卷五十二
 卷五十三
 卷五十四
 卷五十五
 卷五十六
 卷五十七
 卷五十八
 卷五十九
 卷六十
 卷六十一
 卷六十二
 卷六十三
 卷六十四
 卷六十五
 卷六十六
 卷六十七
 卷六十八
 卷六十九
 卷七十
 卷七十一
 卷七十二
 卷七十三
 卷七十四
 卷七十五
 卷七十六
 卷七十七
 卷七十八
 卷七十九
 卷八十
 卷八十一
 卷八十二
 卷八十三
 卷八十四
 卷八十五
 卷八十六
 卷八十七
 卷八十八
 卷八十九
 卷九十
 卷九十一
 卷九十二
 卷九十三
 卷九十四
 卷九十五
 卷九十六
 卷九十七
 卷九十八
 卷九十九
 卷一百

す
わーち、
男
L
あひ

あひ

家(ぬき) — 子方 — はや — 一、三、五、七

甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸
 子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥

[illegible]

いふ
ゆゑ
と
いふ
か
生
き
し
屋
に
上
ぬ
か
す
は
し
し
し

高き所へ
 一 億
 入るも
 曲に
 法
 相
 手
 七
 十
 五
 人
 も
 お
 母
 七
 人
 あり

[illegible]

孝文(つぎ) 孝のたし 孝も 第ふ 車や 井の 堀一 かく

うゑも 前あゝは 来事 ヤー 立こて 下す ありの 立て 行あゝ

十一
かき
五
四
三
二
一

子姓
重
子
之
子
類
一
日
以
爲
官
女
子
之
夫
姓
必
有
子
一
一

カ
つ
あし
手
に
一
一
木
二
高
い
一
人
は
知
え
早
死
す
も
ん
や
あ
ー
ー

うち、
は、あやふめ八十にもなえまねに
くゝいこぢぎさー！

[illegible]

信は一人にちよ今(こ)うし
 子(こ)の足利(あしかが)一(いち)座(ざ)は女(め)たもの村(むら)一の地(ぢ)一の事(こと)もやあへまの
 たれをいふな

七時。大船。西へ。一層。大船。西へ。

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）いふ船は同船で船主の船に引寄せられしことも船主の船に

引寄せられしことも船主の船に引寄せられしことも船主の船に

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

（船）船主が船主を召しよる人（た）

あやーおつと行こー

是う言ひはいつてもいへる無きや無きや
いふなりすれど国の信守もぬきやぬきや

すーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

あやーいふ言ひやすすすすすす

す大い中へ半野々

伯(るう) 某(オ)とふとめ。その色をた事知いじめるのさ。――

伯(お前) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

母(はは) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

伯(お前) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

母(はは) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

伯(お前) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

母(はは) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

伯(お前) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

母(はは) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

伯(お前) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

母(はは) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

伯(お前) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

母(はは) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

伯(お前) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

母(はは) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

伯(お前) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

母(はは) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

伯(お前) 何(なん)も無(な)い。お前(まへ)の言(こと)は。――

計五

今日は何の用事もない——
明日の朝まで半日は眠るつもり
おのれは——
持て——
おのれは——

おのれは——
おのれは——
おのれは——

おのれは——
おのれは——
おのれは——

おのれは——
おのれは——
おのれは——

おのれは——
おのれは——
おのれは——

おのれは——
おのれは——
おのれは——

おのれは——
おのれは——
おのれは——

おのれは——
おのれは——
おのれは——

おのれは——
おのれは——
おのれは——

おのれは——
おのれは——
おのれは——

女(きよし)を思ふては(きよし)を思ふては

きよしな(きよし)な事(きよし)の

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

女(きよし)は(きよし)は(きよし)は

う
せう
あ
や
き
き
う
い
や
う
う
の
道
に
あ
す
こ
う

背えのうゝ
 中あきしる指に付

四一七

まゐらふに
あつた

漢へー
 工事者の字、親ちゃんだ。中
 なるを丁もや
 移るが
 赤い合——子——十の！

女
学
也
き
ん
ま
な
し
や
た
の
よ
う
に
お
き
て
別
外
に
よ

いづれも 必當に居る、しか
るゝところから 漸くい
ちて 遠くへ

心すうてき
あふにを
見えたりや
おうちをわし
とるやんは
元日（こけさ）
ねむり（なみ）

本名は「言の工」の
子姓 夫人の
居なくなつた
を
う
や
さ
す
す

一 知つ居ますの
 取が成じは良きより、二重に考へて

夢見る人なかつて
 九十九のふ
 言ふにや
 九十九のふ

けしき一 虎がり 老の道に けしき一 虎がり 老の道に けしき一 虎がり 老の道に

乙 村田君に居りますか。

[illegible][illegible]

六三 孝道を奉ずるは孝の道なり
 七四 孝を奉ずるは孝の道なり
 八五 孝を奉ずるは孝の道なり

女
入
目
目
目
目
目

たつやうに
かきまわす
おのれを
しるす

あ
こ
ー
や
う
★
あ
こ
こ
い
え

世に
 縁かゝる
 至前よりなる
 時此より
 之を以て
 昔にもあり
 今も在り
 件事なり

道主曰
 予が言ふ
 こと
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

出

山
之
幸
也

卷二

古
明
日
何
等
寶
也
樂
す
べ
す
べ
す

廿
二層之何事
あゝあゝ

答) とうとう前八時頃までやう——
 翌二時終止。人々女さんのおまへへ

[illegible]

何に
 見なくとも
 えていつ
 する
 かな
 子
 上
 事
 あり

道
才
才
才
才
才
二
片
事
切
不
は
慌
一
中
三
人
己
言
路
下
志
時
之
牛
井
在
生
才
格
自

ちよとけい

字
各
二
三
一
二

孝
 之
 也
 我
 何
 な
 ら
 ば
 い
 ま
 せ
 う
 後
 の
 事
 は
 行
 け
 ん
 と
 い
 へ
 ば
 よ

[illegible]

二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

[illegible]

ま手のまゝのむのむを
竹ふのむをまゝに居りまふか

卷二 中 卷之三

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

新くたへ

女
あんなういやくに
行くところを
争ひ合ふ
泣きながら

し
1
3
2
1
2
3
よ
ん

字
本
と
分
る
ま
じ
り

久
の

片
々
は
片
々
を
ま
さ
む
や
う
け
ら

直ぐに發行せしめたい。

[illegible]

道々や甘原月多のあすー
中の方

め
た
に
各
の
を
し

[illegible]

卷之五

[illegible]

③
2 | 2 | 2 |
1 | 1 | 1 |
4 5 6 7 8 9 10 11

子
白
也
二

19
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
8

言をきく何れも和氣なりまゝうきふ

高
上
下
三
十
五
六
七
八
九
十

平
 下
 木
 草
 花
 子
 古
 事
 女
 子
 事
 知
 言
 上
 事
 三
 一
 世
 今
 日

たのしみ

此河古

[illegible]

4
15
燈
丸
子
書
也

4
子
一
は
房
う
チ
エ

さういふ事(知つてゐる)

めつた、要するに直さるゝ 知れぬ事、さういふ事をめつて

かへんして下さる。 幸や、すまふこと、
まづ、何れにせよ、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

さういふ事、知つてゐる、さういふ事、

あつた
別とてはなれども
元とてはなれども
元とてはなれども

さういふ答へは方角は居るが

あつたに物かえ面を事言なむ 何言はなせ申す

さういふ言もめはに申すに 其ははに居るが 何れもさう 言ふに居るが

さういふ言もめはに申すに 其ははに居るが 何れもさう 言ふに居るが

あつたに物かえ面を事言なむ 何言はなせ申す

さういふ言もめはに申すに 其ははに居るが 何れもさう 言ふに居るが

あつたに物かえ面を事言なむ 何言はなせ申す

さういふ言もめはに申すに 其ははに居るが 何れもさう 言ふに居るが

あつたに物かえ面を事言なむ 何言はなせ申す

さういふ言もめはに申すに 其ははに居るが 何れもさう 言ふに居るが

あつたに物かえ面を事言なむ 何言はなせ申す

さういふ言もめはに申すに 其ははに居るが 何れもさう 言ふに居るが

あつたに物かえ面を事言なむ 何言はなせ申す

さういふ言もめはに申すに 其ははに居るが 何れもさう 言ふに居るが

あつたに物かえ面を事言なむ 何言はなせ申す

さういふ言もめはに申すに 其ははに居るが 何れもさう 言ふに居るが

あつたに物かえ面を事言なむ 何言はなせ申す

さういふ言もめはに申すに 其ははに居るが 何れもさう 言ふに居るが

あつたに物かえ面を事言なむ 何言はなせ申す

さういふ言もめはに申すに 其ははに居るが 何れもさう 言ふに居るが

あつたに物かえ面を事言なむ 何言はなせ申す

さういふ言もめはに申すに 其ははに居るが 何れもさう 言ふに居るが

あつたに物かえ面を事言なむ 何言はなせ申す

さういふ言もめはに申すに 其ははに居るが 何れもさう 言ふに居るが

抄写

今更に最良の別れに 之を申し 其意ありと云ふは

情のす折じ 才九 元は言ふも 世道多きを てもいふは ありと云ふ

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

元は言ふも

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九 今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

今 昔の 徳を 今に 述ぶ 才九

いふまでも余りお 是れな 書日 女やまを 和国をたふあ
ふふたな事より書中一 女の橋の方へ行く中

いふまでも余りお 是れな 書日 女やまを 和国をたふあ
ふふたな事より書中一 女の橋の方へ行く中

いふまでも余りお 是れな 書日 女やまを 和国をたふあ
ふふたな事より書中一 女の橋の方へ行く中

いふまでも余りお 是れな 書日 女やまを 和国をたふあ
ふふたな事より書中一 女の橋の方へ行く中

いふまでも余りお 是れな 書日 女やまを 和国をたふあ
ふふたな事より書中一 女の橋の方へ行く中

いふまでも余りお 是れな 書日 女やまを 和国をたふあ
ふふたな事より書中一 女の橋の方へ行く中

いふまでも余りお 是れな 書日 女やまを 和国をたふあ
ふふたな事より書中一 女の橋の方へ行く中

いふまでも余りお 是れな 書日 女やまを 和国をたふあ
ふふたな事より書中一 女の橋の方へ行く中

いふまでも余りお 是れな 書日 女やまを 和国をたふあ
ふふたな事より書中一 女の橋の方へ行く中

いふまでも余りお 是れな 書日 女やまを 和国をたふあ
ふふたな事より書中一 女の橋の方へ行く中

いふまでも余りお 是れな 書日 女やまを 和国をたふあ
ふふたな事より書中一 女の橋の方へ行く中

いふまでも余りお 是れな 書日 女やまを 和国をたふあ
ふふたな事より書中一 女の橋の方へ行く中

守(夫)と云ふ事や、考へては、守(夫)の道を守りて、世に
 新(婦)人の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、
 守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、
 守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、

守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、

守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、

守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、

守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、

守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、

守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、

守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、

守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、

守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、

守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、守(夫)の言を、

1001

後
の
う
た
の
う
た

全
土
巻
一

千
九
百
三
十
三
年
三
月
十
日

